この日をつかんで今・ここを生きる
——Dr. Tamkin、ゲシュタルト療法、密教の心理療法をめぐって——

中谷ひとみ

ソール・ベローの小説『この日をつかめ』(1956)の主人公Tommy Wilhelmは中退した自分の大学時代を振り返って、文学Literature Iの授業でLiederとLovettの編集によるBritish Poetry and Proseのテキストを読んでことの意味あるものだったと回想している。小説の中の発言であるから多少詳細過ぎるとしても、文学作品が人生に影響を与えることはしばしばある。心理療法と宗教と文学的営為は一見相互に異質なものとみえる。しかし病的症状を呈する人を対象とする心理療法を広く活用すれば、宗教や文学作品と同様に、それほど深刻でなくても問題行動を起こしたり道徳的に受け入れ難しい行為に走ったり精神的に未熟な人に、より正しく生きる方法を示唆することができる。生きようが方法が見つからない人やそれを模索する人にも、宗教や心理療法や文学は資する。そうであれば、心理療法と宗教と文学作品を互いに比較検討することでそれぞれの方法の特徴やそれぞれの分野の特異点も発見できようし、その方法をめぐって東西の文化に共通点や相違点も浮かび上がってこよう。また実際それらをうまく使えれば、生きざまの中に文化共生も可能となるはずである。本論はアメリカ現代小説と心理療法と密教にみられる、言語を使った療法を考察し、東洋と西洋の言説と思想を考える。

1. 人類の救済者 Dr.タムキン

『この日をつかめ』の主人公トミーは年齢が44、いかつ要領、たくましい背中をして一見強壮な男に見えるが、失敗者であり金銭的にも精神的にも窮地に陥っている。その原因は主として彼自身の「弱さ」と気づきのなさにある。彼は人に頼りがちで、自分で人生を切り開いていこうとする堅固な意志、進取の気性、判断力、金銭感覚に乏しい。麻薬にまで手を出す薬中毒で、それ非難されると言い訳に走る。感情やトラブルを表に出す女静かであるが自分では言うが、それらはすっく顔の表情に出る。俳優になろうとして前後の意見もなく大学を中退してハリウッドへ行った時のように、良い結果をもたらさないとわかっていても、やっててしまう。子供っぽい傲慢さが原因で失職し妻にも愛想を尽かされ現在別居中で、子供の養育費の催促を受けているが、父親の援助を当たにして、真剣に再就職しようとは思っていない。わざと父を怒らすような言動を採り拡感を買って軽蔑されるが、自分の自虐的なまでのその衝動に気がつかない。彼は自分の性格上の欠点や若さや人間関係における感情、例えば母への思い、母に対する父の態度ゆえの彼に対する反感などに気づき、これまで見えなかった自分自身を見据えて成長しなければならない。
この日をつかんで今ここを生きる  中谷ひとみ

いのだ。
医師として成功し今は引退しホテル住まいの実父 Dr. Adler に金銭的援助を断られた主人公は、代理父といえる Dr. Tamkin に助けを求める。ベテナ師のようでもあるタムキンはトミーにかけないの700ドルをラードの先物市場につき込むせめて破産させ窮地に追い込むのだが、独占の愛の哲学と主として言語を用いた逆説的方法により、トミーに真に生きる（seize the day and live in the here-and-now）ことの意味を教える。タムキンの主張によれば愛は自己の自我超越のために必要な基本的なものであり、彼は執拗に人間世界の愛の不在と狂気を強調する。「ホテルの誰もが精神病で、精神病は人類の秘められた歴史であり隠された病気である。．．．狂気の最たるものはビジネスマン——冷酷で、得々と繰り広く、騒々しいビジネス階級のやつら——で、抜け目なさと大胆な嘘と誰も信じないような荒唐無稽な言葉でこの国を支配している。」（63）彼は自分がこの病を治癒させる人類の救済者であると、トミーに明言する。愛の在・不在、健康・病気、正気・狂気といった二分法の分別に依拠し、その言語を何度も繰り返すことによって補強しながら、人類が進むべき道を示そうとする。とはいえ二分法別の極ではない。人間を「強者・弱者」「成功者・失敗者」の二分法で分別し、レッテルを貼り、強者が成功を収めると考え、そのような人を賞賛する父権制社会の中で、既存の制度の価値観では排除された二分法の中間に、いや二分法を越えたところに、トミーを導こうとするのだ。

タムキンはトミーとの対話を通して彼が失敗者たる理由を自ら意識化し成長する手助けをするが、その際に特異な方法を採っている。彼の巧みな誘導、逆説的な方法の中で重要のは、彼が意識しているいないにかかわらず、所与の言語である英語を巧みに利用していることである。まず、二分法の言説で一見合理的に見える論理周辺しながら、それを越える地点に到達させようとする。彼によれば、人間の中には真の魂と偽の魂など様々な魂が同居している。形勢は不利だが前者は真実を愛し、後者は亡きものにしようとする。そこで愛は憎しみに変わる。よって自殺はすべて殺人であり、殺人はすべて自殺である（70－71）。二分法言説が解体し始める。この主張は初めトミーに自分は他の人々とは異なり殺人者ではないと思わせ、彼の中に深く根付いている殺人者・非殺人者、加害者・被害者の二分法と、自分が成功できないのは社会のせいだという被害者意識を補強するが、タムキンとの対話を通じ小説の最後の葬式シーンに至ると、自・他、生者・死者などの二分法はもちろん過去、現在、未来の線的時間の概念すらが瓦解してしまう、彼は見知らぬ死者に対するあふれんばかりの愛しさや他の人間との一体感を感じる。ここに至る2、3日前その兆候として、すでに彼は直覚的な真実把握と純粋な愛の目覚めを経験している。「日頃から彼が嫌っており、今はその嫌悪感が最も強く感じられる」タイムズスクエアの地下道で様々な落書きを見、それを書いた「不完全で青ざめた顔の人々」（84）に対する愛情が沸き起こり、思わずに「私の同胞たち、私の兄弟姉妹たちよ」（85）と叫ぶ。自分に彼らにも祝福あれと、単なる同情や自己憐憫ではなく心から願う。嫌悪とこの上ない愛情を感じる逆説的な場所に

104
は何か新しい時空間が開けているのだと言えよう。タムキの想像力は人を困惑させるものではあるが、彼自身の言によれば、彼は「最良の文学、科学、哲学を読んでいる。」（72）ロゴス＝辺倒の人間ではなく、彼自身二分法を克服しているからこそ、トミーを二分法をも弁証法をすらも越える高みに導くことが可能なのだ。

所与の言語がどのように利用されたかをさらに論じるには、トミーの発話困難を思いださねばならない。彼の発話困難は正確に言うと、彼に言葉が欠如しているというより「濃いこと（“a thickness of speech”）」によって引き起こされる。彼が俳優を目指したころすでに顕著であったつもりは「真のどもりではなく、思いが濃い故の、そして録音帯がそれを誇張するような」（23）ものであった。バニックになると、言いたいことはたくさんあっても、いざそれに言葉が出てこない。妻子を見捨てた理由を父から尋ねられても、たくさんある理由を簡潔な言葉にまとめることができない。家族を見捨てたのは女がいたからだろうとか、すべてお前のせいだと父から言われると、トミーの「声は濃密で不明瞭になり、どもっててしまう自分の思いを表現できない。」「何か魂胆があるのだろう、そんな訳のわからない行動をとるのには、父から何を期待しているのだ」と話問しても、「助けてほしい」という言葉は口から出ず、「大声で所構わず狂ったように泣き出す」（53）始末である。言語で意思疎通できないから、彼は、ボディランゲージの発露となるのだ。しかし彼の発話不能はバニックに陥っているわけではない、日常の会話にすら現れる。自分を愛しているかと父に証されても、思いのほどを言葉で十分表現できない。トミーの課題は感情と理性の不均衡の是正であり、彼を混乱させるばかりのロゴス過多とその結果としての濃密過ぎる言述を如何に薄くスリムにするかなのだ。いやいつの彼こと、制度として確立している所与の言語とはまったく違う言語体系を内在させても良い。

タムキの哲学は「現在、ここ・今だけが現実で、この日をつかめ」（66）である。彼はトミーをその「ここ・今」に連れ行く救済者だ。「現在、ゲンサイ、永遠のげんざい、...途方もなく、光り輝き、美しく、生と死に満ち溢れる」現在を自分のものと意識させるために、彼には英語を使った他の秘策がある。所与のローグ起源の言語を利用し尽すのだ。第一に、彼の哲学の重要な理念を表した言葉を詩のような言述で何度も繰り返すことが挙げられる。トミーの濃い言述ゆえに言葉にならない声とは異なり、詩は濃密な言述がスリム化された明瞭な声であると言えよう。詩句を反復発声すれば、より容易にそれが特別なリアリティとなって意識に上る。タムキによれば、「「ここ・今」の鍛錬をすると未来や過去のことを思い煩わなくなり、混乱しなくなる。」（89）我若に現在だけの自己存在となり、現在の生を全うし、それを満喫できる。彼はトミーに次のように指示する。

You have to pick out something that’s in the actual, immediate present moment, [a]nd say to yourself here-and-now, here-and-now, here-and-now. “Where am I?” “Here.” “When is it?” “Now.” Take
トミーはタムキンが自分に催眠術をかけようとしているのか、あるいは騙そうとしているのか、ラード株の売却から自分の気を逸らそうとしているのかと説るが、タムキンは「祈りの文句を唱えるように」「ここに今私はボタンを見る。ここに今私はボタンを縫った糸を見る。ここに今私は緑の糸を見る」と言い、「そうすることが如何にトミーを落ち着かせるかを示そうとする」する。この時トミーは元妻Margaretが自分に読み聞かせたKeatsのEndymionからの一箇「悲しみよ来たれ！／...／汝と決別し／汝を欺くことを考えたりしが／今は世界で汝ほど愛しきものなし」を思い出す。「嫌がらず」(90)思い出していることが暗示するように、この一箇の意味内容にまだ抵抗はあるものの、単純な現在形一人称肯定文構造の「ここに今...」の字句の反復発声の効果が現れ、何かしら勇気づけられた彼は苦しみと悲哀に満ちた自分の人生をあるがままに受け入れつつある。

第二に、頭韻のような言葉遊びでもタムキンの巧みな方向づけの一つである。「...the money made me guilty. Money and M urder both begin with M. M achinery. M ischief.」と彼が言えれば、すかさずトミーが「What about M ercy? M ilk-of-human-kindness?」(69)と反応する。Money、M urder、M ischiefのような言葉の好ましさからざる意味内容にもかかわらず、M 音の繰り返しによって醸成されるリズミカルな音声の力が、意気消沈しているトミーの心を弾ませ、元気づける。言葉遊びの興に乗ってきた彼は、自分のせっかげまった状況も一時忘れて楽しむ。音楽が人を解放するように、音の遊びが彼の精神を自由にする。自分に慈悲を施してほしい(M ercy)という彼の甘い考えも、彼の性格上の欠点も、この遊びの中では深刻さが若者して単なる音声あるいは音声化された文字記号にすぎない。遊びはその言葉の中に本音を吐露させれば、人を重荷や強迫観念の縛りから多少なりとも解放し、その昇華作用で精神的な余裕が生まれる。また笑いはナチュラルキラー細胞を増やし免疫力を高め、人を療し強くする。これらは自己回復へと導く。

第三に造語を使うことが挙げられる。タムキンは“MECHANISM VS FUNCTIONALISM：ISM VS HISM”という自作の詩を披露して、トミーに「覚醒せよ、汝は偉大なり」と高らかに讃え彼を称揚し、勇気づける。

If thee thyself couldst only see
Thy greatness that is and yet to be,
Thou would feel joy—beauty—what ecstasy.
They are at thy feet, earth—moon—sea, the trinity.

Why—forth then dost thou tarry
And partake thee only of the crust
And skim the earth’s surface narry
When all creations art thy just?

Seek ye then that which art not there
In thine own glory let thyself rest.
Witness. Thy power is not bare.
Thou art King. Thou art at thy best.

Look then right before thee.
Open thine eyes and see.
At the foot of Mt. Serenity
Is thy cradle to eternity. (75)
中谷ひとみ

この日をつかんで今、ここを生きる

ているだけのようである。しかしこれが言語システムという観点から彼を内から変えていく。

英語と音声の力を利用したタムキンの逆説的な方法による巧みな操作、否、支援で、合理的思考あるいは理性の力というよりは繰り返しによる音声の力によって彼の処世訓「現在——ここ・今——だけが現実で、この日をつかめ」が、トミーの頭というより聴覚・発声器官などを通過して身体全体にインプットされていく。また機械論や機能主義などの既定の思想言説がタムキン独自の言説の中で再利用され、造語により所与の言語体系が脱構築される。件の詩が提示された時、トミーは「息が詰まり首を絞められたような気がして言葉を発することすらできな」(76)かったが、文無しとなり絶望的にプロードウェー通りをあてもなくさまよう時には、彼の中に変化が見られる。彼は車を売ってホテルの代金を払い、Oliveにしばらく自分を助けてほしいと頼もう、彼女が直そう、彼女は自分を愛しているのだからと思っている。いまだに甘い考えているのだが、確かに変わりつつある。

トミーは通りの数限りない人々の流れ——さまざまな人種、年齢、男女、才もいれば凡才もいる——「それぞれに秘密を持ちながら暮らしている人々の顔に、生きる特別な起動力や真髄のようなものを感じ取り「私は働く、私は過ごす、私は戦う、私は設計する、私は愛する、私は執着する、私はししをする、私はくっする、私はねたむ、わたしはおもしろいがれる、わたしはけいいべつするわたしなしにわたしなばかれるわたしなはほしい」と誰よりもそしてこの上なく遠く列挙し唱えあげる。」(115) タムキンの指示通りに彼が発した各々の簡潔な現在形肯定文のフレーズは主語・述語動詞の単純な文型から成り、主語の主体的、自発的行為を表す。他動詞の場合でも目的語は省略され、行為主体とその行為にのみ焦点が置かれ、行動し感じ欲する自分のみが、今・ここにいる。また現在形が示唆するようにそれらはトミーが、そして誰でもが、いつの時代にも経験するものである。万人の人生という劇場における一場面なのだ。これらの意味内容を示す語を息もつけるスピードで発話するうちに、所与の言説は意味内容が削り落とされ純粋に音となり、その〈音語〉が保持する、論理を越えた魔力によって自・他、主体・客体、仮想・現実の二元論が無化されていく。トミーは一人称主体である彼自身の生を生きると同時に、他者・普遍的な人間一般の生を生きている。自分の生は他者の生であり、他者の生は自分の生である。彼と他者とは境界・分断なく一体であるから他者の喜怒哀楽は彼自身のものであり、自分のそれらの感情は他者のものである。二元論はこうして超克される。そして二元論的存在と価値観が支配する所与の制度の中で喜び苦しみ生きる同じ人間としての共感や連帯感を生み出す。

ついにトミーは小説の最後で見知らぬ男の葬式に出くわした時、当事者である死人の終焉の物語であり同時に弱き者・失敗者としての自分的人生の物語を語ることができの。それを語ることばが自分の身体の深みから沸き起こる。理由もわからないあふれる涙と声にならない嘆嘆に、彼が語る物語——悲しみなどすべてを包含した生と、それを生きる人間への共感と、人間存在そのものの肯定——のディスコースが書き記されている。葬儀場の花と明かりが溶け合った彼の認識

108
の中で、彼自身の声は葬送の重苦しい鎮魂の音楽。「憂いに沈んだ海のような音楽」(118)と重なり、その発露を見つけ出した。所与の言語ではない彼自身のことばが、内在化かつ外在化されたの。彼の声は敵人とそこに居合わせたすべての人（他者）の声である。自即他、他即自。葬送の音楽—即—彼の声であり、彼の声—即—音楽である。そして彼の物語—即—それを語る言葉であり、彼の言葉—即—物語である。トミーが最終的に到達し葬送の音楽に重ねられた彼自身の言葉は、所与の言語とは異なるロゴスを超越した言語システムである。それはこれまでの分裂した彼の主・客二元論的な言語の発話主体からではなく、たとえ一時的にではあっても肉体的にも精神的にも一つにまとまった十全な者から、かつすべての人間から、「今・ここ」に発せられた。これこそ真の「ことば」であり、この言葉に到達して初めて彼は成長できたのだ。

トミーは音楽のことばと同じ力強さを持つ、所与の言語以前のより根源的な言語体系を得て、それまでとは異なる欲望主体に変わった。彼を今までとは異なる存在のマトリックスに移し、意識と肉体のありようを変革したのは、所与の言語を使ったタムキンの逆説的な方法である。繰り返し発話される音に内在する、ロゴスの力を凌ぎその難点を克服する力が、トミーに他者との人間関係の中での自分の真の感情に気づかせた。戦火に発展し続ける資本主義社会における失敗者トミーの自己再定義を可能にし、自分の居場所を見い出させた。今彼は失敗者としての自分も自分の存在自体もあるがままに受け入れられる。水はあらゆるものを洗い流す。水のイメージは小説中に幾度か現れている。涙の水はトミーの発話困難を引き起こしていたロゴスの過多部分を削ぎ落とし、彼の肉体と言葉を先鋭化し、浄化・純化していったと言える。貨幣によって可動される資本主義社会の価値観では、涙は単なる感傷や敗者の印と受け取られ、その価値は認められにくい。しかしそれ故にこそ、制度の下では切り捨てられる涙の水が、所与の価値体系の中で全く異なる言語体系と価値観の出現を促し、体制の中で誤ってされている人間の再生の契機となる。トミーはもはや死者・生者、主体・客体、自・他、勝者・敗者、意識・無意識といった二分法の領域にはない。縦的時間のシステムの下にあって過去に捉えもしない。

2. 心理療法における気づきの法則

ところで、トミーは心理療法を受ければならぬほど深刻な状態であったのだろうか。心理療法とは「広い意味では、パーソナリティや行動の変化に関係し、「“患者を変えるよう”」のわけではなく、“患者が自分自身を変えるのに役立つように”デザインされ」(『心理療法』2 4, 5) た治療過程である。精神分析、行動主義理論、そして第三勢力としてアメリカでは1960年代以降西海岸を中心として急速に広まった人間性心理学に基づく方法が大きな流れとしてあった。最近の傾向としては、1960年代後半から物質主義、個人主義、科学主義などが代表される西欧社会の病理性が明らかになり、自由連想などの口頭セラピーを中心とした精神分析や行動主義の伝統的心理療法が行き詰まり、70年代アメリカで「ゲシュタルト、バイオエナジェティックス、ロルフィング
この日をつかめで今・ここを生きる　中谷ひとみ

などの人間性／実存セラピーを代表とする数多くの実験的／体験的セラピーがめざましい勢いでお
発展してきている。．．．グループで行う個人的体験を重視し、「喪失された身体の復活」と自己
実現を目指すのである。（『臨床心理学の周辺』151、153、および『心理療法1』『総論』参考）
身体・自己回復や自己実現なら、「患者」でなくとも必要であろう。

N. D. Sundberg & L. E. Tyler（1962）は治療の介入がねらう主要目的という視点から、各々の心
理療法のアプローチにおける治療者の行動を以下のように分類している。（1）支持的、指示的な心
理療法に使われる、正しいことをしようとする患者の動機づけの強化；（2）心理療法の多くの学派
で重要な、鬱積した感情の表出を促し、情動の圧力を減らすこと；（3）人間学的心理療法、Rogers
などで重要視される、成長への患者の内なる潜在能力を解放すること；（4）強化を選択的に適用し
て条件づけと学習の一般理論を用い、やっかいな習慣を除去・変容させること；（5）先入観や歪ん
だ認知構造に気づかせること；（6）自己認識・自己洞察などの自己認識を高めること；（7）集団・家
族療法のように対人反コミュニケーションの促進である。また Rogers（1957）は治療者と患者
との関係を重視し、有益な心理的変化をもたらすための必要十分条件として、治療者の「共感、
真実性、無条件の肯定的関心」（『心理療法2』16－17、下線は筆者）を挙げている。

資格ではなく同様の資質が心理療法家とカウンセラーに必要であっても、実現させる行動変容
は心理療法とカウンセリング（国分の定義では「身の処し方の援助法で．．．いわば人生学で
あり、治療学の色彩は薄い。」）とは異なる。前者では適応行動の特定、弁別刺激、強化刺激
の調査と除去、あるいは適応行動があっぱらはめるなどの正の強化子を与えるなどして、適応行動
を減少し適応行動を増やしていく。後者では外からの働きかけよりもクライエントの主体性を
重視し、今までとは異なる行動を主体的に選択できるように促す。カウンセラーとクライエント
の良好な人間関係が基盤となり、言語的・非言語的コミュニケーションを通して行われるが、臨
床心理学の修士取得者でないとできないわけではない。（国分 監修4－5）ここで最初の疑問
に戻ると、トミーは心理療法を受けなばならぬほど深刻な状態であるというよりはむしろ、精神
的に成長するために適切なカウンセリングが必要だと考えた方がよくある。ただしカウンセラー
としてのタクミは、Sundberg & Tylerおよび Rogers の考えと照らし合わせても、（2）（3）（5）（6）
の下
線部は結果的に満たしたとしても、非常に逆説的な方法でトミーにかかわったといえる。

『この日をつかめ』を読む上で人間性心理学の基本的考えは興味深い。それによれば、人間は
一人一人が独自の個性を持ったユニークな存在である；人間は自らの中に成長あるいは自己実現
する力を持つ；「今、ここ」で体験されるものや個人にとって意味あるもののが重要である；人間
には主体性があり、自己決定の責任がある；人と人との出会いやその関係性こそが変化を生み出
す；人間は単なる部分の総和ではなく、統合的全体性を持つ。代表的理論家には自己実現の概念
を提唱した Abraham H. Maslow（1908－70）、クライエント中心療法の Carl R. Rogers（1902－
87）、ゲシュタルト療法の Frederick S. Perls（1893－1970）などがいる。（坂野 編 4－5）こ
れらの考えは病む人の治療のみならず、健康人でも人格の陶冶や精神的成長や自己開発に貢献する可能性が大である。

「今ここで」といえばすぐ連想されるのが、やはりゲシュタルト療法であろう。この心理療法は人間性心理学を背景にしたhuman potential movement（人間の潜在性開発運動）のアカデミックな傾向を持つ流派のひとつである（『臨床心理学の周辺』154）が、この心理療法と人間性心理学の基本的考えとタムキンの方法を比べてみることが有益である。科学的・心理療法や、それと共通点を持つやかな発展としてよいカウンセリングと、文学的・思想の違いから、文学テクストの特質を照射できる。治療や援助、発動や宗教的救いも、また違うはずだ。

「直す」から「直る」への意識改革した他の個別の心理療法と同様に、ゲシュタルト療法はクライエントの主体性と積極的関与が前提となり、体験的グループセラピーの形をとることが多い。クライエントが依存的に不成熟な人格から、成熟し統合された人間（whole person）になることを目指し、「今ここ」の現象学的場におけるクライエントの自己の生きざまや全存在に対する気づきを促進させる。（詳しくは恩田・伊藤 編 133）そのための基本的ルールは、自分を在ありと
なり自分に気づかざるため、今ここに居あわせない人についての評価は禁止し、解釈・説明・質問も禁止し、セラピストやグループの勧めるに常にあるクライエント個人の責任のもとに見落させ、潜在的能に重きを置き、そして暴力行為を禁止することである。今ここでの感情や感じ・身体の気づきを現象その一人称肯定文で話させ、また気づきを促進するためにポディ・ワーク、文章
完成法、心理劇（役割演技）、イメージ法、夢を生きる、芸術療法などのゲームを行う。（133－34；下線部分は筆者による）

ここで小説に戻ろう。リスクの大きい先物取り引きに引っ張り込みながらも、タムキンはトミーとの何気ない対話を通じて彼が気づかない様々なこと——「図」の模様で見えなくなっていた「地」のそれ——を言語化・意識化させようとしている。朝、父と口喧嘩した後ロビーでタムキンと会い「どうしたんだ？君の家族にまつわれる問題を話してみないか？」と言われて、トミー
は「ちょっと父と口論になったんだ」と答える。タムキンに「口論なんてどこにでも、どんな親子にもあつて、親子喧嘩がこの世になくなることはないよ、君のお父さんのような立派な紳士でもね」（61）と水を向けられて、トミーは家族に対する自分の感情に関わる問題を吐露し始める。「僕が父を怒らせててしまうので、父は僕に怒っているのだけれど、年寄りって皆そんなものはかもしれないですね」と言い、一観論にすり替えて自分の責任を不明確にしてしまうトミーに対して、タムキンは「息子だってそんなものさ」（62）と言い、トミーの父親に対する反感や態度に気つくように会話の軌道を正しい方向に戻す。ここから50才代で死んだ母や息子たちのことと言及しながら、トミーは自分自身に内在する問題の核心部分に近づいて行くのである。タムキンは、妻に不義密通されて子供が他者の子ではないかと疑っている父親の話をして、トミーに
彼の父子関係が特異で悲劇的なものでは全然なく、取るように助からない些細なことにすぎず、冷静に
自分を見つめる必要があることを示唆する。実の父から拒否された息子は、この代理父とも言えるタムキンが自分を気にかけて親身に接してくれるのがこの上なく嬉しい。タムキンはカリフ・ナルニアでエピソードの王女の心理療法にも携わったなどと自慢するなど、胡散臭さを払拭できないのが、トミーが本当に必要とし心から望んでいた共感や無条件の肯定的関心を示しながら、あるいはそう装いながら、カウンセラーの役割を果たしているのである。
「今お父さんがなにかのお金くれれば、相続税を払わなくてもいいのになあ」などと半ば冗談を言いながら、タムキンはトミーに「君はお父さんを愛しているのかね」と尋ねる。この質問にトミーは「とびつい」て、「もちろんです。もちろん父を愛していますとも。僕の父。僕の母。．．．」と答えるが、この時「自分の魂の中心で何かが大きいと引っ張るように気をする。魚が飼に食いつくと、その生命の力が釣竿を動かす手に感じる」（92）のようなもので、「それまで何かはまったくわかりず、姿も見えず、捕らえることもできなかった」（93）自分の無意識の欲望や恐れなど、自分の真の姿が見えてくる。タムキンが父と自分の親子関係のことを言及したことから、トミーは自分と息子たち、そして妻との関係について思いが至り、感情的になりながらも語り始める。妻がひどい女で「男たちと出歩いているくせに、自分からは金を巻き上げている。自分を罰するために生きている」（94）と言うトミーに対して、タムキンは「お父さんは君が妻を捨てて自由になったから嫉妬しているのだ」（94—95）と言ったり、二人の妻を持ち本能のままに生きるRappaport老人の話を、「[君もあの老人のように]本能・衝動のままに生きたいと思っている。だが、心配事があってまだ実行に移せない。例えば君の息子たちのことだが、．．．」（97）とトミーの心の琴線に触れ、核心をつき始める。トミーは感情的この上なく地図を踏むように「息子たちのことだけは持ち出さないでくれ」（98）と叫ぶ。彼には養育費を払うばかりで自分の息子たちと会えない不満、自分がいなくても彼らが成長していく寂しさと不安、妻が彼らを彼女のようになるよう育てていて、自分の敵となるようにしめていますという凝視の凝視と憤りがくすびたっていた。（98）

タムキンはさらに続けて「なぜ彼女に君が苦しみようにさせておくんだ？．．．苦しみと結婚するな」（98）と強い語調で言う。苦しみ、いやそもそも一方的に苦しみと認識する彼の歪んだ認知構造と決別するように、トミーを促す。共感しているような言動を見せつつも、彼が苦しみや悔みや憎しみに捉われてばかりいること、彼の犠牲者意識、真の自己と対峙しない卑怯さや意気地なさ、自己正当化しようとばかりしている幼さ、良い父親としてあるまおうとする欺瞞などに気づかせようとしているのだ。トミーはタムキンの話を聞いて「知らず、なるほどと思う。その通りだ。苦しむことが人生なのであり、苦しむことをやめれば、生きてることに何も残らないことを彼は知る。」（98）こうして未熟なトミーは苦しみの人生であるがままに受け入れることができ、成長していく。受け入れれば腹が据わり、対処法も見えてくる。このように、何気ないように見える会話の中には無意識の意識化を通して自分の真の姿が見えるように意図された巧みな
話術と方向づけがあり、行動のための信号が出されているのだ。一連の対話は失敗者トミーの人生の物語を彼自身が自分の言葉で語られるようにドラマチックに展開していく。この対話術とロゴス起源の言説を巧みに活用した方法が、タムキン独自の心理療法（カウンセリング）だったのだ。

レストラン・ヘイヴンズは『心理療法におけることばの使い方——つながりをつくるために』（1986）で、心理療法におけることばの使い方を具体例を交えながら解説している。摂食障害やひきこもりなど現代的な病をも視野に入れ、心理療法が行われる患者とセラピストの言語コミュニケーションの方法が、第1部「共感のことば」、第2部「対人関係のことば」、第3部「行為のことば」という独自の言語論に基づいて論じられる。これらのことばの使い方の中でも、「気持ちをなぞる語りかけ」、短い情緒的なことばの連なりなどの「共感的語りかけ」、患者を刺激して反応をみる「投げかけ的語りかけ」、誇や格言——一般論を含むであろう——を引き合いに出したりして「思い込みを摘さぶり、偏りに気づかせる」ことばの使用などをみると、ことばという点でもタムキンの対話と心理療法の間に多くの共通点を見出せるのだ。

基本的には、先に述べたゲシュタルト療法の下線部分はタムキンの方法にも当てはまると考えてよろう。特に現在形の一人称肯定文で話される一種の文章完成法とも言える方法は、共通点として頻発であり、また重要である。自分の行動や感情を正しく理解させたり、トミーの個人的人生ではなく抽象的な普遍的人生の物語を語らせるシミュレートさせたりして、より大きな視野で物事を見て行動できるようにするのだ。このように理論的な面ではゲシュタルト療法とタムキンの方法とにかなり重なる部分があることがわかるが、具体的な技法という点では大きな差が見られる。それがまた心理療法やカウンセリングと、文学的営為との違いでもあろう。よく使われるゲシュタルト療法の具体的技法としては、ホット・シート（椅子、座布団に自分がイメージの中で想像する他者や自己を座らせて対話する）；ファンタジー・トリップ（例えば、想像世界で老者に会い、対人関係の緩えの解決の知恵を授かる）；夢のワーク（夢を過去の出来事とせず「今—ここ」において再現し「生き」てみて、夢の中に投影された自己の「生きざま」に気づく）；実験（経験をしてみたり試してみたりして、新たな気づきや洞察を得る）；ポディー・ワーク（内面的な「生きざま」は現象として身体に現れると考えるため、例えば肩がこるような場合擬人法により肩になったつもりで語る的に行う）がある。（『心理療法3』140－42）ただし例えばファンタジーといっても、通常の意味でのそれというよりは心理療法独特のものであり、ほかのさまざまな心理療法同様、その理論的基礎や方法論を厳密に守った上で行われなければならない。

タムキンはトミーに英語でmimicryさせ、文章を完成させたり、復唱させたり。一見言語ゲームのようなものをさせたり、茶化したり、興奮させしたりしていたのである。そして無責任にも、文無しのトミーを絶望の淵に落として消えてしまう。しかし所与のロゴス起源の言語をひ
たすら使い、その先にトミーが内包化させたのは〈音語〉であり、自分が何度も何度も発した音声の力によって見いだしたのは、今ここに生きている確かな実感であり、失敗者ではありませんても世界での自分の居場所があるということであった。過激にクライアントを興奮させて、自分の真の感情を露にして気づきを促すことはゲシュタルト療法でも見られる方法である。ロゴス起源の言述を手段として、タムキンはトミーの所与の言語システムの隙間をぬって彼に彼自身の内から新しい気づきをもたらした。ゲシュタルト心理学の地と図の論理のように、それまで気づかないでいたものに到達させて、生きる道筋を発見させた。それを可能にしたのは、対話のみならずロゴスを駆使することであり、またその難点を補償しきれを越えさせる音声・言語の力である。

ところで、日本で開発された心理療法はどのような理念と技法を持つのだろうか。「不安であっても、そう感じつつ、現在必要なことを実際に」行い「現在になりきる」、「あるのがまま」というような言葉や、基礎となっている自然観が示唆するように、森田療法は日本的な文化に根ざした療法と言える。彼は否定されているが禅を彷徨とさせる。『心理療法3』103－1、103－4）「治療の場での「今、ここで」の体験に介入することにより、患者が自分のあり方を体験的に理解し、修正し、深化させていくのを援助する」（野島 編 136－7）この療法も、今まで見えなかった自分の姿の認識を通じて自己変革を促す点で、ゲシュタルト療法と共通する面がある。不安を排除しようとすればするほど不安感が増し、不安に注意が引きつけられる役割に陥る。不安は誰にでもあり、不安をそのまま受け入れ、真の自己を「あるのがまま」認めるよう促すのである。「治療観の根底にあるのは、心身自然一元論」、「人間内在する自然治癒力への信念」、「内的な問題（心）はその人間の身体的行為、すなわち生活全般に現れる」（132－33）という、仏教的心身一如と同様の発想だと言える。

このような治療理念に基づき3～6カ月の入院治療を行う。まず原則的に7日間の絶対臥床期で自らと向き合い、退屈感と行動への欲求で自然治癒力を醸成する。次に最も重要な作業・集団療法である作業期で、作業と集団への関わり方を通じて不適応を引き起こす心的態度を浮き彫りにする。軽作業からより持久力・忍耐力が必要な作業に従事させた後に、遮断された治療空間から解放して社会生活に戻る準備をさせる。これから時間・空間的に展開する治療の場を通じて、症状の意味は問われない。この不間は「症状の意味を問わないことであり、治療者患者関係における転移感情を取り上げないことである」が、治療者は「患者の作業や集団への関わり方については面接や日記のコメントを通じて積極的に反応する」（野島 編 134－36）森田療法は「ヒポコンデリー（普通神経質）、強迫神経症、不安神経症」を含めた「神経質に対する精神療法」（『心理療法3』106）であるが、その根底にある考えと方法と、ゲシュタルト療法やタムキンのそれとを比較すると、それが行動・集団療法であり、何よりも言語に焦点を当てた心理療法とは言えないのである。日記を書かせてコメントしても、その言語の機能と使用目的は大きく異なる。それでは東洋では気づきを促す別のどんな療法があるのだろうか。
3. 空海の密なる言語世界

アメリカに禅を普及させることに大きく貢献した錬木大拙は、1962年の評論で次のように述べている。

「空」は空間の義に思いがちなされるよねがちな。それでも仏教者はいつもその弁明に悩ま
されるが、存在といえば、いつも空間の存在の義に考えられて、時間を入れない。しかし実際
は空と時を分けるわけにはいかないのである。空と時を合わせて「一念」というほうがよい。
here–now が、それである。仏教では、この一念を大切に考えの一つにしている。成仏は一念
にあり、などという。一念とはまた行の義である。... これは修行の行でなく、一念すなわちそ
れが行である。...

とにかく、「空」を時の中から解釈して、「即今」という。平たくいえば、ただいまである。
「空」がわかるというのには、このただいまがわかるという意味である。ただいまを手に入れな
くてはならぬ。このただいまを無限そのものだと悟るとき、零すなわち無限の式が成立す
る。アッというこの一瞬が直ちに無限の時間そのものであると気のつくとき、東洋思想の根抵
にふれることができる。華厳の事事無礙法界では、一即十、十即一の円融性があると説くが、
ここでいう一は零で、十は無限の義であることを忘れてはならぬ。華厳ではこのように数字を
象徴させている。十は無数の万象である。一はこの万象を一に摂したところで、それは絶対の
一である。すなわち 0 だ。0 = ∞の式をここに当てはめてよい。すなわち、ただいまがそのま
まに、無終無始の永遠である。（72–73）

鈴木の言によれば、仏教は「ただいまを手に入れ」、この日をかんで今・ここ・このことを
精いっぱい生きるべしと教える。こうして初めて無限の時間、無限定の空間での永遠の生を得ら
れるのだ。「今・ここ」、この日をかむことはタムキンやトミーの西洋にあっても東洋の仏教言
説にあっても、生の大きな課題だ。

特に瞑想の心理療法的効果を論じながら、精神科医の安藤治は仏教もまた心理療法であると述べ
ている。何となれば、正しい人生観や世界観がない「無明」の認識を契機に、人はそれまで
の人生を「反省」するようになる。その反省の自覚の程度はさまざまなとしても、児童の心理療
法の場合などは別として、ほとんどの心理療法はこの「自己反省」あるいは「無明」の認識を出
発点として始まるものであり、仏教もまたその作業であることに変わりはないからである。
（109, 111）『勤労論』によれば、密教の根本は「諸仏自証の教」（「諸仏がそれぞれ自心の源底
をさると（如実知心）おしえ」）であり、また龍猛によれば「あるがまま自心の源底をさるる
瞑想（三摩地）は、他の仏教では説かれていない」密教独自の点である。「自心の源底をさるる
（自証の）方法を学ぶこと」（高木・岡村 編 123）が密教だとすれば、見えていなかった自分
この日をつかんで今・ここを生きる　中谷ひとみ

の真の姿を認識するように促すゲシュタルト療法や、そうして自分自身をあまりに受け入れるよう支援したDr.タムキンの方法と密教を比較検討してみる必要がある。

空海密教の「瞑想」は同じ東洋のもので禅の瞑想体験とは異なる。また、彼の日本独自の護国思想がインドにおける民衆の守護という本義を踏まえながら中国のように国家政治権力（国王）と巧みに結びつくことによって流布を期したこと（松長輝 64）や、宗教の宿命としての民衆教化のための実利的な方法、「自分自身のなかにある仏としての性質にめざめ、苦しむ人々の救済に努める」（70）という大乗・利他主義の最終目標、空海の没後真言宗に大きな発展をもたらした彼の弟子たちの戦略など、心理療法とは全く異なったり相矛盾するような側面も、真言密教にはあろう。しかし、こと三密行や阿字観やマンダラ観想には心理療法の要素が色濃く見られ、その理念の根本にはゲシュタルト療法やタムキンの方法とは異なる、空海独自の言語観が発見できる。彼の瞑想・修行はロゴス起源の言語の背景にある西洋の主要な言語観とは異なる言語観に裏打ちされたものなのだ。

密教の代表的な行である身・口・意の三密行とは大宇宙と小宇宙、つまり各々の行者の本尊と行者がつくるためのものである。本尊として選択される各々の諸仏、諸菩薩、諸明王、あるいは諸天は教主である大日如来の特性の一つを受け持つと考えられるから、ひいては法身（個々の人間を含めた全宇宙の真実）である大日如来との一体化を目指す。具体的には両手の十指を組合わせて宇宙の真理を凝縮、象徴化した印契を結び（身密）、口に真言や陀羅尼を唱え（口密——前者は短く、後者は長いもの、一字だけのものは種子という）、心に本尊を観想する（心密）のである。心密は意密とも言い、宮坂は「心を統一する深い瞑想（瑜伽）に住し、満月輪に相応するさとりを求めて願う心（菩提心）を観想する」と説明している。（231）ここでも瞑想が介在するが、三密行で顕著なのは印契のような所与の文字言語とは異なる一種の絵文字で示される言語のイメージ喚起力であり、本尊との一体化のシミュレーションに内化するイメージの力であり、繰り返される音の力である。ロゴス起源ではない形的なことばと、言語の音／音のことばと、シミュレーションのイメージ喚起力が密教では決定的に作用するとなると、想起されるのはタムキンの微妙で逆説的な支援方法、特にトミーが彼の教えどおりに「私は働く、私は過す、私は戦う...」とこの上なく速く列挙し唱えあげたことである。所与の言語を逆説的に利用した様々なタムキン独自の「カウンセリング技法」が、他の人々との関わりの中でのトミーの自己再定義を可能にし、自分の居場所を見い出させ、失敗者としての自分も、自分の存在自体もあるが、ままに受け入れることへと導かず決定的役割を果たした。音語はトミーでも密教の場合で重要なのである。ただし彼の場合はロゴスのバランスとも言えるような所与の言語の音声であり、密教の場合は短い言葉の繰り返しであり、比較的低く単調な音声で、時に無意識的にすら発せられる。ロゴス性は希薄なようである。

真言密教では行者は大宇宙の本体である大日如来との「絶対無分別」（井筒「意味の深み

116
地方・水・火・風・空大（五大）という万物の構成要素は悉く音声の響きを有している。空大の「性質は無礙（さまたげられない）、働きは不障（さわりがない）で、物質として考えられた虚空（空間）を意味し、他をその中に安住させる場である。」（中村 他編 335）声があれば文字があり十界（仏界・菩薩界・緣覚界・声聞界・天界・人界・阿修羅界・畜生界・餓鬼界・地獄界であるが、われわれが生きる現実のこの世の諸相を示す）は悉く声字（言語）をそなえている。
ただし仏界の言語文字のみが真実であり、大日如来の語る秘密の言葉、真言を通じて人は仏の世界に入るのである。この大宇宙の根源語には「原因」も「理由」も、「いつどこで始まるということもなく、いつどこで終わるということもない。...永遠の円環」であるが、「それが発出する原点が。...梵音アルファベットの第一字音である阿字」（井筒 273）である。「すべての発声の始め、すべてのコトバの開始点、一切のコトバの現象に内在する声の本体」（274）、あるいは「一字からすべての文字を出生し、一字のうちにすべてが収まる、いわば一即一切のシンボル的表象」（高木 - 岡村 編 117）、また「仏教その他のおしえ（真理）すべてを総合するシンボルであり、阿字をみれば、一切のおしえの根本を知ることになる」（118）。

しかし井筒によれば、「ア音発声の構造的瞬間には、音音はまだなんら特定の意味をもってはない。...ままだ特定のシニフィエと結ばれていない純粋シニフィアン」（274）である。彼は万物創造のプロセスと空海の言語論を、以下のように解説する。

宇宙的「阿字真言」のレベルでは、音音の発出を機として自己分節の動きを起こした根源語が、「ア」から「ハ」に至る梵音アルファベットの発散するエクリチュール的エネルギーの波に乗って、次第に自己分節を重ね、それとともに、シニフィエに伴われたシニフィアンが数かぎりなく出現し、それらがあらゆる方向に拡散しつつ、至るところに「響」を起こし、「名」を呼び、「もの」を生み、天地万物を生み出していく。（276－77）
この日をつかんで今・ここを生きる　中谷ひとみ

る意味現象の、ほとんど取るにも足らぬミニアチュアにすぎないのだ。」(276)

空海自身は阿字で自分の言語論を展開するよりも、同様に一切の万物を包含し、梵語の最終文
字でありウロボロスのように阿字と繋がる吽字を『吽字義』で分析し、吽字にあらゆる教えの
理・教・行・果、すなわち真理とその教えとそれにもとづく修行とその果法、すなわちさとりの
法が収め尽くされていると主張する。吽字が訳(仏：因縁を表わす)、阿(天：仏の名に含まれ
る一切法の母、一切法の体、従って一切実相の源、根本存在)、吽(仏：一切諸法損減の義)、
 sess (仏：我の義で人我法の二種があり、吽字とは逆に増益の相を表わす)から構成されて
いると分析した後、吽字の総合的な意味を見るのである。(梅原 95-97)また、因縁の訳に
諸々の外相、二乗、及び大乘の様々な教えの自己主張を見、仏にその主張と争いの中で有を主張
する一派を、吽字無を主張する一派を、阿に非や不などを主張する一派を、仏教諸宗派の教理
の見取り図とする。(111-12)訳を報身(修行して仏になった姿；一切の教え)、阿を仏の法身
(一切の理)、吽を応身(仏が現実世界に現れる姿；一切の行)、禍を化身(凡夫救済のために変
化した姿；一切の果)と考えると、吽字には仏の四身が体現され、教理行果が集約されているこ
とになる。(110)このように様々な点から、阿字と同様に吽字の中に世界のすべてを見る。ロゴ
ス起源ではない形態的仏であるが仏の世界を示す。そして「吽字等の密号密義
(深秘的意味)を知る人こそが正遍知者(さとりをひらいた人)であり、初発心のとき直ちにさ
とりを完成し、偉大な教えの輪を転ずる人である。それは、ただ吽字等の実義を知っているから
こそできるのである」(村上 152)。

密なる存在そのもの・大宇宙の真理・法身である大日如来は「苦、空、無常、無我の四相をこ
えて、因縁をこえて、自在に、自性のままに活動する」(梅原 104)。密教の心理療法は、大日
如来となってこそできるように導くのである。阿字観やマノダ観想でも、万法が生まれた彼
この根源的存在を観想することにより、煩悩・心の執着を断ち、その根源、法身・大日如来
と一体になる。法身という渾然としているが超越的かつ絶対的主体・行為者となって初めて、

「今・ここ」の環境世界で真に生きることが可能となる。東洋的観想は初期段階の「不安定な情
動の解放と消滅」という点においては治療と同じ意味を持つが、さらに深い。「暗い不安定な情
動領域の彼方に、本来の自己の次元ともいうべき領域が存在することを、さまざまな形で」(湯
浅 290)示唆するの。空海は大宇宙の真理という抽象に大日如来という「身体」を付与し
た。密教の根本・大日如来とは自己分節を経て万法の声・ことばとなる根源語であった。した
がって、真理＝根源語＝身体。真理＝即＝根源語＝即＝身体。空海は異次元レベルの身体の言説
で、ことばを考えた。密教心理療法においては、人はそのことばに、いわば「絶対零度の言葉／
始原のことば」に到達する。あるいは「絶対零度の身体」となることを目指すのである。
4. 所与の言説の彼方に

「地と図の関係としてのゲシュタルト」は丸山圭一郎が注意を喚起しているように「世界の出現そのもののことであって、その出現の可能性の条件ではない」（梅ル＝ポンティ）のであるから、実体的な物ではない」（266）。安藤も言うように「自己反省」あるいは「無明」の認識の契機である。今まで見えなかった自分の本当の姿——新しい世界——が顕現する。仏教と考える世界とは元来「宇宙という意味ではなく、自分の感覚によって捉えることのできる周囲世界と自分の心作用をまとめて意味」（立川323）する。両者は連動し、一体一体であり、心作用が変われば環境世界も変わる。環境と心の「世界」の変化の契機、心作用の新機軸と環境世界の姿容を見ると、東洋と西洋のゲシュタルトに興味深いい通点と相違点があることがわかる。

この日をつかめ」の主人公は「今・ここ」に生きているという実感が得られず、自分の居場所も見え出さない。結婚生活に破綻し金銭的にも窮地に立っている失敗者である。その原因の一つは、彼が自分自身の言葉を持たず自己を表現できないことである。彼の発話困難が示すように、所与の言語言説のロゴス過多をそぎ落とするか、あるいはそれとは異なる言語体系を内在化させなければならない。トリックスターで導師のタムキンによる制度化された言語・英語を逆手に取り徹底的に利用した巧みな方法で、トミーはその背後にある異なる言語システムにたどり着く。所与の言語を使い尽くして越える、あるいは立ち戻るのである。見知らぬ男の葬儀に出くわした時、彼は当事者である棺の中の死者の人生終焉の物語であり同時に弱きもの・失敗者としての自分自身の人生の最終シーンの物語を語る言葉が自分の身体の深みから沸き起こるのを自覚する。これが本当に語るべき物語であり、その言葉はあふれ出す涙と無音の鳴嘆、ロゴスを越えたあるいはそれ以前の言語である。

ユダヤ文学ではステレオタイプの一つである「シェレミール」トミーが所与の言説以前のより根源的したことばに到達し、一時的であるにせよ他者との新しい関係を結び、ある種の愛の感情を体験し、生の新局面に至れたのは、英語という所与の言説を利用しつつタムキンの様々な方法を通してであった。ロゴスのパフォーマンスとも言えるような方法である。ロゴス起源の所与の言語を、過剩部分が限りなく削り落とされ最も単純化された主語ー動詞の文として、この上なく早く発声されると、〈言語〉になる。その声と繰り返しが持つ力が、だめ男トミーに生きる力を与える。この言語の発話文では主語であるトミーの主体的関与が自然と彼に意識される。積極的に行動し他と関与し感じる自分が、今・ここに出現する。ミュレーションの言説によって、これまで気がつかなかった自分の新しい自分のアイデンティティ形成が図られたのだ。ロゴスのパフォーマンス、音語、他者二分法を越えた体験ミュレーションによるゲシュタルト形成が、タムキン独自の心理療法の技法のキーワードだ。

トミーの意識の中では葬儀場の花と照明が溶け合い、彼の言葉が弔送の鎮魂の音楽と重なっている。音楽が奏でる重苦しい調べやリズムや余白が、彼のことばと波長を合わせて共にうねる。
この日をつかんで今・ここを生きる　中谷ひとみ

彼の声は彼自身の声であると同時に故人とそこに居合わせたすべての人々の声である。時空間を超えて自由にとて居であり自由である。そして音楽のことをは即－彼の声であり、彼の声－即－音楽のこともーである。彼の物語－即－それを語る言葉であり、言葉－即－物語である。小説『この日をつかめ』は真の言語とは如何なるものかを論じているとも言える。英語という所の言語のみでは、自分と世界の本当の物語を語り真にそれらを理解することを通じて自ら実現するか否か成長していくための役に立たず、むしろ妨げとなり、所の言語の彼方にある言語システムが必要である。それを示唆するために英語と音楽が小説内に対立的に構造化されている。しかし英語や音楽として意識されるギリシャ言など所の言語の言語を巧みに使い尽くし、ロゴスを利用し尽くしパフォーマンスさせてこそ「彼方のことば」に到達できる。所の言語の究極に新しい言語世界と生が広がるのである。トミーを失敗者に陥れ、趣味にしようと欲望する資本主義社会が発することばは大海のうねりのごときものであろう。このロゴスを越えた言語を内在化させ、世界のことば自体となり、ともにうぬことが、自分と自分をめぐる現象界の実験を知る／語り「この日のつかんで今・ここを真に生きることなのだ。

もちろん『この日をつかめ』では空海の著作に見られるような説でその言語論や存在論は語られない。しかしこの根源的なことばは、空海の主張と通底しているという印象を受ける。空海は全宇宙の真理という抽象に大日如来という「身体」を付与した。また、密教の根本の教えを、所の言語である当時の日本語とは異なることば、像的なイメージ言語や表音文字――書やマンダラや仮名など――を通して感得させようとした。漢字の場合の文字合成とはまったくちがう。表音文字の特性、字母という構成単位が限りなく広大な文字／真理の世界を生産していくことばの世界を内省した。大日如来とは自己分節を経て万物の声・ことばとなる根源語であった。真理＝根源語＝身体。真理＝即＝根源語＝即＝身体。空海は異次元レベルの身体の言説で、ことばを考えた。ことばにラディカルな身体を付与した。密教心理療法においては、人はそのことばに、いわば「絶対零度のことば」あるいは「絶対零度の身体」になるのである。絶対零度は鈴木大拙の言う「$0 = \infty$かつ$\infty = 0$」と説明してもよかろう。

ベロー小説でも空海でも、真の言語は所の言説の彼方にある。そしてその言説に到達する／なることが、両者の心理療法なのだ。ソール・ベローが密教や空海の言語論を知っていた小説に反映させたのかかも知れないが、読者理論によれば、小説の受容・解釈とは別問題であろうし、またそれは考えにくい。しかしこの根源語に達するための方策は、真言密教と小説とは一見大きな違いがあるように見える。資格ある師が弟子の素養と修行の熟度を見極めて法を授ける儀式である灌頂や様々な法具を見ると、やはり宗教であることが実感される。ところがその基礎となっている空海の言語観と同様、彼の心理療法方法と効果にも小説との共通点が見出される。真言仏教の基本的な行であり現身のままでに成仏できるとされる三密行の口密は、真言の繰り返しによる音声の力に、契縁を結ぶ身密や本尊を観想する意密は、体験シミュレーションの潜
在力・イメージ誘起力に依拠する。阿字観にせよ、経験的事物そのものの表象ではなく元型的な宇宙的本質が描き出された深層意識的図柄であるマンダラの作成や観想にせよ、大日如来と一体化し真の言説に到達し自らその根源語となる目標を達成するために、やはり所与の言語とは異なる言語システムと、音語の力と、シミュレーションと繰り返しのイメージ誘起力を利用しているのだ。

心理療法をめぐって「この日をつかめ」の西洋的言説と空海の東洋は出会う。ベロー小説の「西洋的」言語観は想像以上に空海の「東洋的」言語観と近かったのだ。しかし同様に心理療法的効果を出せとも、その手段とそこで使われる言語の性質は違う。タムキンは所与の言語・英語の論理性を最大限に利用する。ロゴスに思いきりパフォーマンスさせる。所与の「悪き」ロゴスを逆に利用し尽くすことで、それを越えるよう意図したのである。したがって小説はトミーが西洋の言説の行き詰まりの元因である自他などの二分法や過去への捉われを生じさせる線的時間の概念を超えるという図式になる。一方、空海はロゴスの分縁的言語以前の絶対無分節態における言語作用を問題にして、自身が根源語となることを促す。ロゴスは始めから不在なのである。彼は密教の根本の教えを所与の言語とは異なることば——形象的なイメージ言語や表音文字——を通して感じさせることを重要視した。阿字や書やマンダラなどである。一即一切の「ア（阿）はすべての発声の始め」であり「すべての文字を出生させる母体」である。漢字の場合の文字合成は全く違い、表音文字の特性として、字母という構成単位が限りなく広大な文字／真理の世界を生み出していく。よって一が一切、一切が一であり、「一種の有機体的な世界構造」の縮図であり、「真理そのもののシンボルの体系」である。（高木・岡村 編 118）さらに空海は全宇宙の真理という抽象に大日如来という「身体」を付与した。書やマンダラや阿字などは、その「身体」を表す。大日如来とは自己分節を経て万物の声・ことばとなる根源語である。よって、真理＝根源語＝身体の等式が成り立つ。空海は異次元レベルの身体の言説でことばを考えた。密教心理療法においては、人はそのことばに、いわば「絶対零度の言語／始原のことば」に、あるいは「絶対零度の身体」になるのである。

心理療法という観点から「この日をつかめ」の文学的為と空海密教を検討すると、東洋でも西洋でも言語を使った心理療法が可能なことがわかる。今、ここで、このことを真に生きることができるようになるための援助として、東西の心理療法ではロゴスをどう使うか、それをどうとらえるか、あるいはそもそもどこから出発するか、それが問題となるのである。

注
1. ソール・ベロー『この日をつかめる』（1956）のタムキンの手法分析は基本的に、本書とモリソノ小説と音楽の「言葉」を論じた拙論「＜退廃する音楽＞対＜進化するおんがく＞：＜英語＞対＜音語＞」、西村孝
この日をつかんで今・ここを生きる 中谷ひとみ


2. 密教では、真理は言語で表現できず、絵画的イメージ（マンガなど）で示されると考えるが、その思想の説明や布教のために、便宜上「即」との言説を用いている。密教の世界観は「専即一、一即多」で表現され、ミクロコスモスである人間がマクロコスモスすなわち大宇宙と本質的に同一であると考えられる。この場合「即」とは同等（equal）という意味ではなく「同じものを別々の見方」（松長『密教・コスモスとマンガ』139）のような意味であり、例えば即身成仏は凡夫だと思っていたものが見方を変えると仏である事がわかる、無限の時間をかけて仏になるのではなくこの身体そのものが仏である事に気がつくのである。仏教的言説で説明すれば、無著渋入、不滅、不異分、あるいは「一切の现存在が客客に相対化される以前の在り方（存在）」（村上 207, 223）である。「即」という独特の言説で、個人・大宇宙、仏・凡夫、主体・客体、自・他等の二分法が解体、超克され、一元論的な世界観が展開していることが示される。伝統的な西洋の言説とは異なり、話す主体とそれが対象化し描出する客体・世界は同じであるから、互いに除外はない。事物－観念－言語記号の相対立する構造もここにはない。多元的世界が一に収斂されているのだ。

本論で「絶対無余の身体」とよぶ場合、「絶対無余」とは「即」と同様に、マクロコスモス・法界・大日如来の身体とミクロコスモスである人間一人ひとりの身体が不二、不離であり、無著渋入している身体のありようを表現している。

3. 安藤はA. J. DeikmanとK. D. Nobleを引用して、瞑想の効果を説明する。前者によれば、瞑想により認識モードのシフトが起こり、通常の「分析的・抽象的・知的的」認識や意識とは異なる変性意識——「より生き生きとした鋭敏な知覚、知覚境界の融解、対象恒常性の減少、身体感覚や三次元感覚の消失、対象に溶け込むといった感覚などの出現」——が現れる（168）。後者によれば「超越」体験——「すくれた明晰さやリアリティの理解、無常性、受動性、合一感、存在相互のつながりの認識、肯定的感情など」（169）——が可能となる。またC. G. Jungは、悟りとは「たましいの全体性の体験としての個性化」（203）であり、「禿は東洋人に対して、『全体になること』Ganzwendungがいかに重要であるかということを教えている」（205）と論じているが、禿をそのまま西に導入することの有用性（価値）は、文化の違いから非常に小さいと見ている。

4. 禿と密教との相違点については後簡『意識と本質』180, 219, 梅原 108などに考察がある。

5. 金岡は密教の形而上学として阿字と六大の哲学を解説し、六大説が本体論的のみならず、認識論的、実践哲学的、また宗教的な側面そのうちに内蔵している事が故に、密教の形而上学として最も完成したものであり、この説の今日的意義はその象徴主義にあると論じている。六大が象徴する種子その他の属性・内容は下表のとおりで、種子については『即身成仏』の説を提示している。（76-77）
<table>
<thead>
<tr>
<th>六大</th>
<th>種子</th>
<th>字義</th>
<th>性德</th>
<th>業用</th>
<th>形色</th>
<th>顯色</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>地大</td>
<td>阿</td>
<td>本不生</td>
<td>堅</td>
<td>持</td>
<td>方</td>
<td>黄</td>
</tr>
<tr>
<td>水大</td>
<td>壇</td>
<td>離言説</td>
<td>湿</td>
<td>撤</td>
<td>円</td>
<td>白</td>
</tr>
<tr>
<td>火大</td>
<td>罗</td>
<td>無垢塵</td>
<td>煙</td>
<td>熱</td>
<td>三角</td>
<td>赤</td>
</tr>
<tr>
<td>風大</td>
<td>訪</td>
<td>離因縁</td>
<td>動</td>
<td>長養</td>
<td>半月</td>
<td>黒</td>
</tr>
<tr>
<td>空大</td>
<td>佐</td>
<td>等虛空</td>
<td>無碍</td>
<td>依不障</td>
<td>団</td>
<td>青</td>
</tr>
<tr>
<td>諦大</td>
<td>咲子</td>
<td>了義不可得</td>
<td>了別</td>
<td>決断</td>
<td>円</td>
<td>種々形</td>
</tr>
</tbody>
</table>

6. ロゴスのパフォーマンスとも言えるような禅の公案は、所与の言語のロゴス性から新しいロゴス性・言説を引き出し試みとも言える。禅および道元の方法についてはあらためて論じたい。

### 引用文献


安藤治。「心理療法としての仏教——禅・瞑想・仏教への心理学的アプローチ」。京都：法蔵館，2003。
井筒俊彦。「意識と本質——精神的東洋を索めて」。東京：岩波書店（岩波文庫）、1991。
——。「意味の深みへ——東洋哲学の水位」。東京：岩波書店、1985。
上里一郎・鈴木八郎・前田重治編。「心理療法2」（臨床心理学体系第8巻）。東京：金子書房、1990。
梅原猛。「空海の思想について」。東京：講談社（講談社学術文庫）、1980。
小倉恒吾・成瀬悟策・福島章編。「心理療法1」（臨床心理学体系第7巻）。東京：金子書房、1990。
恩田守・伊藤隆二編。「臨床心理学辞典」。東京：八千代出版、1999。
金岡秀友。「密教の哲学」。東京：講談社（講談社学術文庫）、1989。
河合隼雄・福島章・星野弘編。「臨床心理学の周辺」（臨床心理学体系第15巻）。東京：金子書房、1991。
河合隼雄・水鳥恵一・村瀬孝雄編。「心理療法3」（臨床心理学体系第9巻）。東京：金子書房、1989。
国分康孝監修。「現代カウンセリング事典」。東京：金子書房、2001。
坂野雄二編。「臨床心理学キーワード」。東京：有斐閣、2000。
鈴木大拙。上田閑照。「東洋的な見方」。東京：岩波書店（岩波文庫）、1997。
高木峯元・岡村圭真編。「密教の聖書——空海（日本の名僧4）」。東京：吉川弘文館、2003。
立川武蔵。「空の思想史——原始仏教から東洋近代へ」。東京：講談社（講談社学術文庫）、2003。
中村元也編。「岩波仏教辞典（第二版）」。東京：岩波書店、1989。
野島一彦編。「臨床心理学への招待」。京都：ミネルヴァ書房、1995。
松長有慶。「真言宗」（『宗派別 日本の仏教・人と教え2』。東京：小学館、1985。
——。「密教・コスモスとマンダラ」（NHK ブックス486）。東京：日本放送出版協会、1985。
丸山圭三郎。「言葉のエロティシズム」。東京：紀伊國屋書店、1986。
宮坂有勝。「密教世界の構造——空海『秘藏宝箱』」。東京：筑摩書房（ちくま学芸文庫）、1994。

123
この日をつかんで今・ここを生きる　中谷ひとみ

村上保時。「空海の「ことば」の世界」。大阪：東方出版、2003。

湯浅泰雄。「身体論——東洋的心身論と現代」。東京：講談社（講談社学術文庫）、1990。

Jung, C. G. 湯浅泰雄・黒木幹夫訳。「東洋的瞑想の心理学」（エンゲル心理学選書5）。大阪：創元社、1983。

心理療法、ゲシュタルト療法については上の引用文献以外に下記を参考にした（仏教に関しては省略する）

上記以外の臨床心理学体系第1〜16巻の各巻。

岩本隆茂・大野裕・坂野雄二編。「認知行動療法の理論と実際」。東京：培風館、1997。

Weiner, Irving B. *Principles of Psychotherapy*. 秋谷たつ子・小川俊樹・中村伸一訳。「心理療法の諸原則」。東京：星和書房、1984、下巻1986。


台利夫。「集団臨床心理学の視点——心理劇を軸にして」。東京：誠信書房、1991。

河合隼雄。「心理療法序説」。東京：岩波書店、1992。

——。「心理療法」（河合隼雄著単行第3巻）。東京：岩波書店、1994。

——。「ブックガイド心理療法」。東京：日本評論社、1993。

Guillaume, Paul. *La Psychologie de la Force*. 八木冕訳。「ゲシュタルト心理学」。東京：岩波書店、1952。


坂野雄二・前田基成編。「セルフ・エフィカシーの臨床心理学」。京都：北大路書房、2002。

鍊幹八郎。「夢分析と心理療法——臨床で夢をどう生かすか」。大阪：創元社、1998。

田中実次郎。「グループセラピー」（講座サイコセラピー第10巻）。東京：日本文化科学社、1987。


鍋田基孝・福島哲夫編。「心理療法のできること できないこと」。東京：日本評論社、1999。

成瀬悟策。「自己コントロール法」。東京：誠信書房、1988。

日本社会臨床学会編。「カウンセリング・幻想と現実 上巻：理論と社会、下巻：生活と臨床」。東京：現代書館、2000。

Perls, F. S. *The Gestalt Approach and Eye Witness to Therapy*. 倉戸ヨシヤ監訳。「ゲシュタルト療法——その理論と実際」。京都：ナカニシヤ出版、1990。


村瀬嘉代子・青木省三。「心理療法の基本——日常臨床のための提言」。東京：金剛出版、2000。

李敏子。「心理療法における言葉と身体」。京都：ミネルヴァ書房、1997。